

# 鼻と舌が憶えている

矢萩 多聞

プロフィール  
1980年、神奈川県横浜生まれ。画家、装丁家。中学1年のとき学校に行くのをやめ、ペンによる細密画を描きはじめる。95年から日本とインドを往復する生活を送り、日本では個展を開催。2002年から本づくりの世界へ。研究書から一般書まで幅広く手がけ、その数400冊を超える。  
著書に『インド・まるごと多聞典』（春風社）、『偶然の装丁家』（晶文社）。

待ちに待った料理がテーブルに運ばれてくる。たちのぼる湯気。いい匂いにおなかが鳴る。いただきます、と箸を伸ばそうとする。

「ちよつと待つて」

同席の友人がスマホで料理の写真を撮りはじめ、ごちそうはおあずけ。間の抜けたシャッター音が鳴り響くたびに、目の前の料理のうま味が吸い取られていくような気がする。

ぼくは何かを思い出すと、映像よりも先に味や匂いが、鼻や口のなかに立ち上ってくる。

幼い頃、何度練習しても回れなかった逆上がりのことを思うと、鉄の味や酸っぱい匂い、がよみがえる。九歳で訪れたカトマンドゥはヤクの毛糸の芳ばしい匂いと、カビっぽいパンの味がした。一七歳、南インドでお世話になったドクターのことを考えると、彼の家に漂っていた消毒液とココナツ油の匂い、シロップみたいなジュースの味が口に広がる。数年前、パンガロールのストで家から出られなかった一日のことは、友人宅のバルコニーに生えていたツルムラサキの葉を摘んでつくったスープの味と切り離せない。

口にし、鼻で嗅いだものが、雑多な記憶のかげらを立体的に結びつけてくれる。もちろん映像から味や匂いを思い出すこともできる。だが、味覚嗅覚からたぐりよせた風景はもつと豊かなディテールに満ちている。

四歳の娘は自分の写真が好きすぎて、もはや写真で見たことを本当の記憶だと思い込んでいくふしがある。写真で分かった気持ちになって、フレームの外の世界が単純化されてしまうのは、親として少しさびしい。インドの友人Mさんは肉魚が苦手、料理も嫌いだ。家族の食卓は、いつも茹で野菜とパンかご飯。息子は大きくなるとオーストラリアの大学へ留学した。慣れない土地での一人暮らしに数カ月でホームシックになり、食べ物が喉を通らなくなった。生活はすさまじく勉強どころではなかった。

ある日、彼は衝動的にスーパーで野菜を買いこみ、下宿の小さなキッチンで自炊することにした。だが、料理なんてしたことがない。とりあえず鍋で野菜を茹で、塩をかけて食べてみた。「おかあさんの味がする！」。思わず涙がでた。いくらでも食べられた。彼は元氣を取り戻し、その後、楽しい留学生活を送ることができた。

何気ないものの中に、何十年もの時や、何万キロという空間を一瞬でとび超えてしまうような大事な記憶が眠っている。

本づくりを生業にしながら、ぼくはいつも料理に嫉妬する。目ではなく、嗅覚や触覚に触れ、ちいさな記憶をよびさます一冊を作りたいと今日も手を動かしている。

## 月刊 みんなぱく

12月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>鼻と舌が憶えている<br/>矢萩 多聞</p> <p><b>特集 市に集う</b></p> <p>2 イスラームとともに時代と場所を越える市場<br/>三島 禎子</p> <p>4 感度を磨いて——イエメンのカート市場<br/>大坪 玲子</p> <p>5 タイの大洪水と水上市場<br/>佐治 史</p> <p>7 インドのショッピング・モール<br/>杉本 良男</p> <p>8 「地域とむすぶ」京都・宇治橋通り商店街<br/>橋本 和也</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇<br/>貨幣編<br/>久保 正敏</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 味の根っこ<br/>トウルンバ<br/>米山 知子</p> <p>16 文化遺産おもてうら<br/>修復とオーセンティシティ<br/>——カンボジア、アンコール遺跡群<br/>石村 智</p> <p>18 音の居場所<br/>パリのムスリムの太鼓ルバナ<br/>増野 亜子</p> <p>20 人間学のキーワード<br/>無縁<br/>浅野 久枝</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|